

## 連載 アメリカ経済史に学ぶ

### 第9回 科学大国アメリカの「科学不信」

明治大学政治経済学部  
専任講師・博士（経済学）  
下斗米 秀之

#### 「科学不信」の台頭

宇宙開発競争が激化している。アメリカが月に人類を送り出してから前半世紀。加速する宇宙ビジネスでは、民間人を乗せて月を周回する計画が着々と進行している。イーロン・マスクの火星移住計画に代表されるように、今や人類は別の惑星に生活拠点を作ろうとすらしている。原子力や宇宙開発、コンピュータ開発など、第二次大戦中に開発された基盤技術は、のちに民生部門に移転され、アメリカ産業の強みとなった。この結果、アメリカの民間企業はすでにNASAを凌ぐ技術力を持つともいわれる。

しかし、科学大国であるアメリカで、科学不信が蔓延している（注1）。例えば、気候変動のために地球の平均気温が上昇し、猛暑の日が増えていることは日々われわれも肌で感じているところだろう。ところがトランプ大統領は、温室効果ガスがもたらす気候変動の影響、地球温暖化対策など科学的な成果に基づく専門知識を軽んじている。地球温暖化懐疑論は、規制を嫌う企業や保守的なシンクタンクからも強い支持がある。

#### 科学は万能か？

確かに温暖化のもたらす悪影響の程度やそもそも地球温暖化が人為的なものかを科学的に証明することは容易ではない。将来の気温上昇の予測も必ずしも確実なものとは言えない。とはいえ、その危険性を無視することは、対策を先送りにするだけだ。科学と政府との関係でいえば、科学的知見の提供者の独立性は担保されねばならない。ましてや政府の好む特定の政策的立場に偏ることがあってはならない。

そもそも科学が万能ではないことを意識することも重要である。科学によって問うことはできるが科学だけでは答えることのできない問題領域をトランス・サイエンスと呼ぶ（注2）。科学的判断を超え、政治的・経済的・社会的な観点を取り入れる必要があるという。だからこそ、科学情報の伝え方が重要になってくる。もともと科学者は科学のことはよくわかっているが、その伝達方法に長けているわけではない。これからの科学者は「象牙の塔」にこもってはられない。

#### 科学コミュニケーションが重要

これまでの科学者の姿勢に一般の人々は、ますます科学不信を強めてきた。科学研究と一般社会との溝は深まるばかりである。受け手の感情に気を配り、共感を得ながら情報を伝える科学コミュニケーションの手法が重要だという。事実やデータの客観性が重要なのは言うまでもない。しかし、その成果をどのように社会に広く発信し、理解を得られるのか。これは科学

1 三井誠『ルポ 人は科学が苦手—アメリカ「科学不信」の現場から』光文社新書、2019年。  
2 佐藤靖『科学技術の現代史—システム、リスク、イノベーション』中公新書、2019年。

## 連載 アメリカ経済史に学ぶ

### 第9回 科学大国アメリカの「科学不信」

研究のみならずあらゆる研究領域に共通した課題であろう。とりわけ、二極化したアメリカにおける政治経済的な課題の解決にはこうした丁寧な対話の姿勢が求められている。

—以上—

1 三井誠『ルポ 人は科学が苦手—アメリカ「科学不信」の現場から』光文社新書、2019年。  
2 佐藤靖『科学技術の現代史—システム、リスク、イノベーション』中公新書、2019年。